

多核種除去設備等処理水の取扱いに関する小委員会事務局 宛て

## 当日表明する意見の概要

氏名 (必須)	(ふりがな) おおつき そうじ 大槻 宗司	団体名 (団体参加の 方のみご記載ください)	(ふりがな)
------------	--------------------------	---------------------------	--------

※ **8月17日(金)を目途に意見表明者に選定された方にご連絡をいたしますので、意見表明者に選定された方のみ、8月27日(月)(必着)までにご提出ください。**

多核種除去施設 (ALPS) 処理後のトリチウム汚染水を環境放出することの是非については容認できると考えます。その理由として、

- ①福島第一原発敷地内にこれ以上の貯蔵スペースの確保が困難となってきた。
- ②科学的に確認されている事実から、トリチウム由来のβ線エネルギーは18KeV程度と弱く、外部被ばくによる生物・環境への影響は考えにくく、また生物的半減期が短いことからトリチウムの内部被ばくによる人体への影響のリスクも小さいと思われること
- ③トリチウムは、宇宙線により生成し、太古の昔から地球環境に自然に大量に存在していること。
- ④世界中の原発や再処理設備などからトリチウムが環境放出されているが、人、生物、自然環境に甚大な影響が出ているという報告がないこと

環境放出の方法についてですが、地層注入、地下埋設は処分後も長期間監視が必要であり コストも高いことから現実的でなく、水素放出や水蒸気放出は、影響範囲が陸地を含む広範囲に広がり、そのため放出後の監視対象地域も広範囲となり、且つ監視対象物も多種に及び負担が大きくなると思います。一方、海洋放出は、世界中の多くの原発周辺で実施されており、汚染範囲は海洋全体と面積は広大になるが、放出時のトリチウムによる放射線量をしっかり監視すれば、正確にトリチウム放出量、言い換えれば、環境に放出された放射線量を管理できる方法であると思われ、この点で優れた方法であり海洋放出案を支持いたします。

トリチウムの環境放出にあたって、最も懸念されることは風評被害であり、このため風評被害を最小限にとどめることが地域住民や地域経済への影響をなくすために最も重要な課題であります。風評被害を極力小さく抑えるには、放出トリチウム水の放射線濃度、放出した総量を正確に把握し、その科学的データに基づくリスク評価をしっかりと行い、結果を定期的に世界に発信すること、そのために、きちっと管理された状態で環境放出すること、そして管理手法に問題がないことを全世界に発信することが重要であると思います。

具体的には、放出するトリチウム汚染水の放射線濃度を全量測定することを提案します。現在のトリチウム由来放射線濃度測定は、サンプリング法であり大量の汚染水からごくわずかの量、1サンプルにつき100ml程度をとり、液体シンチレーター（乳化シンチレーター法を含む）で1～2時間かけて測定する方法が採られています。この方法では全量測定は不可能であります。

サンプリングするのではなく、貯蔵タンクから放出する過程に放射線測定装置を配置し、測定する方法を採用され、放出水の全量測定を行うことを実現していただきたいと思えます。

今日現在はこのような放射線測定装置は存在しませんが、聞くところによると開発は進んでおり、近く実用可能な装置の完成が公表されるものと期待しております。

放出される汚染水の全量につき、その放射線濃度がしっかりと把握され、積算放出放射線量（＝トリチウム量）を常時公表することによって、汚染水放出が安全を確保しつつ、シッカリ管理されていることを証明することができます。この証明が風評被害を最小限にとどめる唯一の方策であると考えます。

本用紙の大きさはA4サイズとし、意見は上記枠内一枚（概ね1600文字以内）で記載してください。

ID（事務局記載欄）